

# 亡靈芝居と東海道四谷怪談

——民間伝承との関連より——

松 前 健

## (一) 怪談と怪談芝居

浄瑠璃や歌舞伎のような、近世の芸能の中にも、その古い筋書きや演出の中に、古代の神話伝承や民間信仰などの要素が、数多く含まれていることは、これまで多くの学者の論じたところであった。

近松以前の古浄瑠璃の世界や、江戸の荒事歌舞伎の世界に見られる、幾多のモチーフは、もちろんのこと、近松以後の浄瑠璃や世話物歌舞伎の中にも、作者たちの個性やその人生観の表現以外に、古代的な思惟が基盤となつてゐることが、実に多いのである。

ここで、そうした伝承的な思惟の形式と、最も密接に結びつ

いているものとして、怪談劇を挙げたい。怪談劇には、日本人が古来持ち続けて来た死霊信仰や他界観が含まれて居り、その所作や振りにも、独特な伝統形式が見られるからである。

月ロケットが飛び、人工衛星が、地球のまわりをまわり続ける、科学万能の宇宙時代にも、お岩様の怪談劇や、ドラキュラの怪奇映画が、大衆に人気があり、テレビに心霊の番組が盛んに出て来るのは、時の今昔にかかわらず、また洋の東西を問わず、科学では割切れぬ非合理の世界を、追い求めようとする、人間の本性の表われである。西欧でも、シェークスピアの作品の中に、亡霊の出て来る、『ハムレット』や『マクベス』などは、超自然的世界と人間の世界との関係に関する、中世歐洲人の考えが端的に出てゐるのである。

日本においては、このような怪談や怪談芝居は、昔から、その上演や興行は、季節に関係があった。夏になると、各劇場、寄席、映画館、ラジオ、テレビに至るまで、毎日のように、累とか、小幡小平次とか皿屋敷とか、牡丹燈籠とか、色々亡亡霊・怨霊を、テーマとした芝居、映画、講談などが、上演せられ、観客に納涼気分を満喫させる。

折口信夫氏は、亡霊劇が、夏芝居に演じられるのは、もともと秋の初めのウラ盆に行われた亡霊供養の前行事としての意味があったのだろうと推定し、これは歌舞伎の創始時代の念仏踊りから始まったものと説いている。古い「歌舞伎草子」を見ると、歌舞伎の元祖の出雲の阿国が、そのかつての愛人とも夫とも伝えられる名古屋山三郎の亡霊を、

おかへりあるか。名古屋さま。送り申さうよ。木幡まで。木幡小路に行きくれて、二人伏見のくさ枕。八千夜添ふとも、名古屋さま。なごりをしきは限りなし。

などとい、魂送りをしている場面がある。念仏踊りそのものが、もともと盆の亡霊送りに行われた儀礼であったのである。<sup>①</sup>

享保十一年死んだ吉原仲の町の遊女玉菊にちなんで「玉菊燈籠」と呼ばれる盆燈籠を茶屋にかけ連ねる行事があり、この三回忌に当る享保三年七月に披露したという正本なども、古い盆

行事と亡霊芝居との関連を表わしているし、これから述べる四世節屋南北の最高傑作『東海道四谷怪談』も、文政八年の盆興行のための書き下しであり、これを人形芝居に移したのも、天保二年の七月であったという。<sup>②</sup>その芝居の中の「蛇山庵室」の夢の場は、ウラ盆の夜のことであり、門には白張り提灯が吊され、その提灯の中から恐ろしいお岩様飛び出して来る趣向なのである。

W・リッジウェイという、イギリスの古典学者が、二十世紀の初めごろに、『悲劇の起源』とか、『非欧州民族の劇および劇的舞踊』などの書を著し、ギリシア悲劇をはじめ、世界のあらゆる民族の悲劇の起源として、亡霊の慰撫・供養ということを挙げたことは、著名なことである。<sup>③</sup>ギリシア悲劇にも、アイスキロスの「ペルシア人」とか「オレステス物語」のように、亡霊の登場をテーマとした芝居があり、これはもともと一種の死霊供養のための儀礼から出て来たものと説いたのである。

リッジウェイは、ギリシア悲劇が、ディオニソスの祭りの春の讃歌である「ディテュランボス」から発達したという、J・E・ハリソンやG・マレイなどの説を批判し、「死した英雄の亡霊の慰撫供養」の祭式から出たのであると主張したのである。

然し、彼は、日本の能を、仏教行事から出たという説を否定

し、もともと固有の亡霊供養から発した典型的な悲劇であるとして、「船弁慶」などの例を挙げたまでではよいが、歌舞伎については、とんだ認識不足で、この方は亡霊供養とは全く関係ない、喜劇・笑劇の類であるとなした。<sup>④</sup> いずくんぞ知らん。歌舞伎こそ、典型的な亡霊供養劇としての要素を、初期の念仏踊り・女歌舞伎の時代から含んでいたのである。

しかも、彼の説に取って都合の悪いことには、亡霊劇でありながら、滑稽味や喜劇性の多い、「法界坊」などの芝居があることである。必ずしも「崇高な英雄の死とその霊の供養・慰撫」というような命題には当てはまらないのである。

同じく亡霊供養の念仏から発達したと伝える、京の大念仏狂言「壬生狂言」の「桶取り」なども、決して悲劇的ではなく、その所作は、むしろ喜劇的である。同じ「壬生狂言」での念仏狂言の中の多くの地獄と亡者の芝居、例えば「餓鬼角力」なども、むしろ滑稽なのである。

幽霊を主人公とした芝居は、古くからあった。中世の能の修羅物も、亡霊の出現とその供養が、テーマとなっている。初期の歌舞伎や浄瑠璃でも、浅間物とか、藤原の怨霊物など、また清水清玄と桜姫物など、亡霊の出る芝居は多かったが、その姿は、後世のお岩様のような、髪の良い、足のない、醜悪な女人

というのではなくして、「火を吹く大蛇」とか、悪鬼の姿とか、一定していなかった。また人の姿である場合にも、立派に足もあって、それほど凄みは出なかったのである。

物語の世界に見える怨霊でも、古くは「日本霊異記」に見える、道場法師の退治した悪鬼は、悪い奴の怨霊の化したものとされている。「古物語」の染殿の后を犯したという悪鬼は、ある僧侶の怨霊の化した変化であった。「太平記」に見える、大森彦七を襲ったという鬼は、楠正成の怨霊であった。何れも丈高く、陸々とした怪物で、後世の幽霊とは異なる。

徳川時代のやや後半期のはじめ、文化・文政時代のデガダニズムの時流に乗って現われた、四世鶴屋南北は、『法懸松成田利剣』、『阿国御前化粧鏡』、『東海道四谷怪談』、『桜姫東文章』など、次々と傑作の怪談劇を書き下して行ったが、そこに画かれる幽霊の姿は、多く女人で、髪を長く垂らし、細い力のない手を挙げ、蒼白でやせこけ、あざや、はれもので、恐ろしい醜怪な顔、どろんとした目付、燃える燐火、足がぼうっとして、下が消えている、といったような形が固定して来ている。芝居ばかりでなく、色々な絵画でも、やはり同様な姿の幽霊の絵が、その当時流行した。円山応挙がそうした幽霊絵の元祖だといわれているのは、周知の事実である。

欧米人には、このような姿とポーズを取った幽霊は、一般に理解できない。私の知人のアメリカ人は、「わたしたちアメリカ人は、あのような髪の長い、弱々しい、極度に栄養不良で、醜怪な、お化けは、一つもこわくないのです。ですから、醜い不具者のような亡霊が出て来ても、恐怖感は少しも湧いて来ないのです」と語っていた。言い換えれば、「お君様の幽霊」は、欧米人に取っては、ナンセンス以外の何ものでもないのである。

日本近世文学の屈指の研究者であり、日本文化の最大な理解者の一人であるはずのドナルド・キーン博士でさえも、南北の最大傑作といわれる『東海道四谷怪談』に対しては、「余りにもグロテスクで、単に観客にカラクリやケレンなどの興味を刺激し、また恐怖を与えるためのもの」と評していて、かえって、『桜姫東文章』の方が、女主人公の桜姫が一遊女になり下りながらも、人間としての自覚を持ち続け、恋の妄執につきまとう僧清玄の亡霊を冷然と叱りつけ、一面、自分の肉体を暴力で奪った無頼漢権助には惹かれて行くという、女の本性を、むき出しに画いる点において、最大の傑作であると評していることにも、何処か欧米人の抱く、共通の怪談劇観が窺われるのである。

もちろん、南北の『四谷怪談』を、単に「幾多のカラクリや

ケレン、早変わりなどの舞台の技巧の興味をそそったり、おどろおどろしい形相で、観客を恐怖におとすためだけのものと規定するのは、やや単純な批評にすぎる。

あの芝居は、一種の心理劇であると、心理学者が評しているように、主人公伊右衛門の肉体的な弱さ、不安さと良心の呵責が良く出ている。小心で億病な小人物が、周囲の誘惑に負けて次第に悪に奔り、身を滅ぼして行く過程が、亡霊の復讐という形を取りながら、描かれているのである。

## (二) 四谷怪談と民間伝承

亡霊の姿が、往々、柳の下や堀端から、長い髪、蒼白い顔、ずぶぬれの姿で出て来る、などといったお定まりの形になったのは、近世後期ごろからであるが、そのイメージの一要素として、ウブメの妖怪の姿があったことは、よく言われることである。

お化け、すなわち妖怪変化と、幽霊との区別は、次第に失いかけていくが、古くは二者は一応区別されていたようである。幽霊は、生前怨みを抱いて死んだ人の霊で、特定の人間に限って、その眼前に、出現する。だから相手がどこに逃げようが、執念深く追いかけて来る。出現は、多くの場合廿三つときであ

る。幽霊は、多くの場合、怒みの相手にだけ見えて、他の者には見えない。この点は、シエークスピアの『マクベス』でも同様である。本人だけの幻覚なのである。

一方、妖怪の方は、多くの場合、特定の場所、例えば川端、堀、井戸、木などにのみ出没する。出現の日も、時として、大晦日の晩とか、節分の晩とか、庚申の夜とかいった特定の行事の日であることも多く、また出現の時刻も、オオマガドキとかカワクレドキというような、宵や暁方に出現することも多い。

特定の人間に対する怒みなどはないから、人間とそれらとの出逢いは、多くの場合偶然である。従って、単に脅かすだけで、無害の存在もあるし、また逆に、福を授ける存在もいる。

妖怪は、多くの学者が論じるように、もともとは古代の山野に住む、自然の精霊の変容であつたり、神々の墮落した姿であつた。

然し、妖怪信仰も、やがて人の死霊・怨霊の信仰の高まりとともに、一種の「死霊化」の傾向を帯びて来たことは事実である。つまり妖怪の内性に、死霊的な要素が取りこまれ、特定の場所や特定の時期に出現する、ある妖怪が、かつてある人物が殺された亡霊であると語つたりするようになる。

北陸のトウジンボウという風が、その名の悪僧の怨念のこま

る魔風だと伝えられたり、近江野洲郡のアブラボウという、春の末から夏にかけて夜分に出現する怪火が、昔、比叡山の僧侶で、灯油の火を盗んだ者の亡霊が化したものと伝えたりするの、その例である。外国にもそんな例がある。

ヨーロッパの民間伝承に広い、「狂暴なる獵人 Wild Hunt, Die Wilde Jagd」、つまり「嵐の魔王」の俗信は、嵐の中を、大勢の供人を引きつれて、物凄いとよめきを立てながら、空中を疾駆する騎士の幽霊部隊であり、日本の百鬼夜行に近い、妖怪行列なのである。これをドイツの一地方では、「ヴオーデ Wode」とかヴオーテス・ヘール Wutes Heer」と呼んでいるのを見ても判るように、もともとチュートン族のヴァーゲン Wagan 神の異教的祭儀の記憶の俗信化したものであるが、少くとも後世は、これを、「亡霊行列 Ghost procession」などと呼んで、死霊の行列だと考えられている。

日本では、こうした「妖怪の死霊化」の過程には、いわゆる「御霊信仰」の影響があつたと考えられる。奈良朝から平安初めにかけて、政治上の争いに敗れて、失脚、憤死した幾多の人物の怨霊が、時として激しい、雷電や地震、疫病を惹きおこし、恐ろしい祟りを行うという信仰が、上下貴賤を通じて、盛んに流行し、世人はこれを御霊と呼んで恐れた。この御霊信仰が、

日本の後世の幽霊信仰の基底をなしたことは、確かである。

平安の初め、政変・陰謀によって虐殺、憤死の目に逢った井上内親王以下の八所御霊、また藤原時平のざんげんによって、太宰府に憤死した藤原道真の怨霊などは、天下に名高かった。就中、道真の霊は、雷神となつて清貫、希世の二人を蹴殺し、時平をも追いまわし、遂に悶死させ、その耳から青蛇になつて這い出たという伝承などが、『北野天神縁起』や『大鏡』などに記されている。

こうした怨死者の死霊や怨霊は中世以後の民間でも恐れられ、天災、疫病、田鼠の虫害など、みな非業に死んだ、あるいは道路に死んだ幾多の御霊の祟りによるものと見なされ、御霊祠が幾つも作られ、またその慰撫の祭りが行われた。虫送りや疫神送りなど、このような御霊を、村外に送り出そうとする行事であつた。御霊は、しばしばゴロウと発音されたから、曾我五郎、佐倉宗五郎、堀田弥五郎など、多くの場合、非業の死をとげた人物の名に付会された。佐倉宗五郎の、怪談は、元禄時代成立とも伝えられる『地藏堂通夜物語』などから取材したもので、多少は史実の中核のあつた事件であるらしいが、これが怪談性を濃くして行つたのは、宗五郎（惣五郎）の名が、ゴロウを含むからであろう。

演劇化は、三世瀬川如卓作の『東山桜狂子』で、嘉永四年（一八五二）、江戸中村座で上演、四世市川小團次が好演した。このような御霊信仰が、山野に棲む自然霊であつた妖怪の信仰の上にかぶさると、「目一つ五郎」などのような、死霊的な色彩の強い妖怪となる。お産で死んだ女の霊がなるといふ、産女なども、同様な存在である。

『東海道四谷怪談』の舞台のさまざまな趣向は、それ以前に、南北が試みた色々な作品のそれを、もう一度ひしかえしたものが多くといわれる。それにしても、その中核は、四谷左門町にある「お岩稲荷 田宮神社」の縁起であり、その信仰的基盤としては、産女の俗信や、道祖神信仰がある。このお岩稲荷は、今でも、この芝居が上演と決まると、役者一同は、必ず参詣し、無事興行がすませるよう祈願しなければならない。もし、これを怠ると、大変な祟りがあるといわれている。

大低のお化けは、呼び捨てであるが、このお岩様だけは、佐倉の宗吾様と同様に、「様」をつけて、今でも呼ばれている。よほどの霊威があると恐れられたからであろう。

お岩様の墓は、ここは多少離れた果鴨塚の西、妙行寺の本堂裏中の奥まつたところにある。

そこで伝える伝承によると、お岩は徳川家の家人田宮左門の

一人娘で、生れながらの醜女であったが、成長して後、江州彦根生れの伊右衛門を入婿する。伊右衛門は、隣家の伊藤某に取り入っている中、その娘のお花に言い寄られ、遂に心動き、お岩を侍の上殺してしまう。お岩の怨念により、伊右衛門、お花、お岩の父親まで、次々と変死する。

このうわさが江戸市内に広まり、正徳五年、山浦甚平というのが、妙行寺に頼んで、お岩の墓を建ててまつたという。それで見ると、お岩様は生れつき醜く、重い痘瘡の患いで、片目盲で、婿に来る者もいなかったと伝える。南北の芝居では、お岩はもと美女であったが、隣家の伊藤の悪だくみで、毒薬を飲ませられ、毛髪が抜け、顔がはれ、ゆがんで、世にも恐ろしい形相となる。最初は美女であったが、後に醜女になったというモチーフは、南北の先行作であった『阿国御前化粧鏡』や『法懸松成田利剣』などの趣向を受け継いだものである。もともと醜女であったというが、本来の伝承であろう。

四谷左門町のお岩稲荷が、一名田宮神社とも名づけられているのは、ここが田宮家の邸のあった地だと伝えられたからで、ここでも、お岩はひどい醜女だったと伝えられ、夫の伊右衛門と隣家の娘との仲を人から聞き知って、本人は血相を変えて外に飛び出し、そのまま行方知れずになった。その走り去って行

った横丁を、「お岩横丁」と名づけ、今に存するという。その後祟りで、関係者一族がみな死絶えたという点は同じである。

この店に、南北が、当時別な怪談劇で、採り上げた、役者崩れだという木幡小平次を、もじった小仏小平とか、またこれも別の事件ではあるが、主殺しの罪科で、死刑にされた直助と権兵衛という、二人の悪党とか、また当時、評判になった砂村の隠亡堀に、心中物の男女の死体が流れつき、鯉かきが発見したこととか、色々なモチーフを採り入れ、これを忠臣蔵の世界に結びつけたのである。

然し、私は、この色々なお岩に関する巷説、実録と称する類は、みな史実ではなく、「お岩様」と称する小祠にかかわる道祖神の縁起伝承であったのであろうと考えている。

現在のお岩稲荷の御正体が、一箇の岩石神、岩神様であるかどうかは、判らないが、少くともその古い形においては、そうしたものであったに違いない。お岩様が、今でも「様」を呼ばれ、尊崇されているのは、現実、その名で呼ばれた岩石神であったからである。「岩神様」「お岩様」「お石様」などと名づける岩石神を、道祖神、山の神、性神として崇拜している風習は、各地に広い。これが女神とされ、嫉妬の神であるとされることも少くない。またこれが稲荷と習合しているものも

少くない。

高崎正秀氏は、神代の磐長姫、仁徳の太后磐之姫、それに近世の岩腰、お岩様に至るまで、一連の「岩」を名とする女性が、何れも醜い容貌と嫉妬の女性として語られていることに注目し、これらが元来一種の山の神の内性を持つていることを論じた。<sup>④</sup>

山の神の座として、聖なる磐座を定めることは、古くから存在し、また日本の山の神の多くが、醜い顔を持ち、性欲と嫉妬を内性とする恐ろしい女神であることは、知られている。お岩様の内性も、その辺から解くべきかも知れない。

ただ現実の四つ谷のお岩稲荷については、その原型は、山の神よりもむしろ里の神であり、また恐らく、道祖神的な機能を持つ岩神であったのではなからうか。

『東海道四つ谷怪談』のお岩様は、最後のクライマックスである蛇山庵室の場では、伊右衛門が非業に死んだ妻のお岩のために、流れ灌頂を行うのである。流れ灌頂とは、お産で死んだり、身ごもったままで死んだ女の成仏のために、人通りの多い橋のたもとや水辺に、四本の棒を立て、これに経典の文句などを書いた布を張って置き、そばに柄杓をそえ、道行く人に柄杓で水を布にかけて貰う。布の色や文字が色あせて消えると、成仏すると信じられているのである。

伊右衛門が、その布の上に水をかけると、布の上に陰火もえあがり、布の中からお岩の亡霊が、白装束、乱れ髪、腰から下は血に染んだ産女の姿で、水子を抱き、現われる。

そして亡霊は赤鬼を伊右衛門に見せる。伊右衛門がこれを受け取ると、鼠があまた現われる。伊右衛門は、驚いて赤児を取り落すと、この児はち石地蔵になる。茫然とした伊右衛門を亡霊が見て、「オホホホ」としわがれた、きみ悪い笑顔を残しつつ、壁に消え去るのである。<sup>⑤</sup>

産女は、一般に、産死した女の霊が化したという妖怪で、赤児を抱き、腰から下は血に染んだ姿で、橋のたもとや、路傍に出現するのである。『今昔物語』の、卜部季武が産女に会ったという説話によると、「児の音にて、いがいがと哭くなり」といい、季武がこれを抱き戻って、「右の神を披きたれば、木の葉なむ少しありける」と記して居り、赤児は木の葉に化しているが、後世になると、これが髓になったり、石地蔵になったりする話が多い。産女は、必ずしも人に害をなすとは限らない。産女から百人力を授けられた話もあるし、また高徳の僧から濟度されて、安産の守り神になったと伝える産女もあった。あるいはこの重くなった児を最後まで我慢して、持ち抱えていると、莫大な金銀財宝を貰ったという話もある。



この「児を抱く女人」の形をした、橋のたもととの妖怪の原像が、もとそうした、水辺の地にまつられた母と子の神で、古い道祖神、塞の河原の信仰や、啼地蔵、夜啼石などの信仰とも通じる伝承であったことは、柳田国男、高崎正秀、その他多くの学者の論じたところである。道祖神、塞の神は、邑落の堺にまつられ、幽霊界と現世との連絡係でもあり、また軍塚かみづかに葬られた沢山の幼児の靈魂の管理者でもあった。

仏法が弘まってから、この信仰も仏教化し、境界の神であり、幽冥界との連絡者であり、また子供の靈魂の管理者でもあった道祖神は、地蔵尊となり、その祭場であった塞の河原は、幼い童わらわの靈魂が、小石を積むという、悲しい伝承となった。産女の原像が、もし、そのような水辺の堺の神であったとすれば、これから授かった児が石地蔵に変わるのも、偶然ではない。

お岩様の産女姿と、石地蔵の話も、恐らく、もとのお岩稲荷そのものに伝わっていた縁起譚であったに違いない。恐らく、子啼石や、啼地蔵の伝説のように、古くはその社地辺から、そうした赤児の啼声などが聞えるという伝承があったのであろう。この小祠を、田宮神社ともいえるのは、その一族田宮氏の居宅があったからと伝えるが、これもよく考えて見ると、芝居では「民谷」という名となっているが、本来はやはり「田宮」であ

ったのであろう。「田宮」は、文字通り、この小祠が、もと田間にあり、文字通り「田を守る神」であったのではなからうか。すなわち、もと道祖神的な神であったものが、後に付近の田の守り神ともされ、「田宮」と名乗ったのであろう。家の名であるというのは、後世での付合のような気がする。「稲荷」の社とされたのは、そうした機能からであろう。実は、現在の、この旧田宮邸跡と伝えられる地域には、お岩稲荷と田宮稲荷との、二つの祠があり、向い合って立っているが、自分こそお岩様をまつる社だと本家争いをしている。然し、それも元来は、道祖神だから二体あったのを、後に引き離したのかも知れない。

お岩様の亡靈の出現に、蛇とか鼠とかホタルとかが、飛び出すのは、これらの動物が、もともと死霊や冥府に関係あると信じられていたからであろう。ネズミという名称も、本来「根の国に住む靈物」という意味があり、『古事記』の大國主命の根の国行きの神話にも見られる。「鼠淨土」という昔話などが、ネズミと他界との関係をよく表わしている。蛇も大國主の神話に見られる。これは後世まで、死霊との結びつきが表われている。

ホタルも、『後拾遺集』巻二十に、和泉式部の、  
物思へば 沢の螢も わが身より

あくがれ出づる 魂かと思見る

の歌などを見ると、靈魂が光って飛ぶのだとする信仰があったのであろう。現在のフクロアでも、神奈川茅ヶ崎などでは、死霊は、雀、蟻、鼠などになると信じられているのである。

注

①折口信夫「夏芝居」同「涼み芝居と怪談」(何れも「折口信夫全集」第十八巻中央公論社昭30年)。

②折口「涼み芝居と怪談」。

③Ridgeway, W., *The Origin of Tragedy with special Reference to the Origin of Greek Tragedy*, Cambridge, 1915; the same author, *The Dramas and Dramatic Dances of Non-European Races in Special Reference to the Origin of Greek tragedy*, Cambridge, 1910.

④Ridgeway, *The Dramas and Dramatic Dances, passim*.

⑤Keene, Donald, *World within Walls: Japanese Literature of the Premodern Era, 1600-1876*, Tuttle, Tokyo, 1976, pp. 458~469.

⑥矢俣万喜多訳注「ドイツの伝説」大学書林 昭33年。A・スライク「日本文化の古刹」住谷一彦・クライナー・ヨーゼフ訳、未栄社 昭59年。

⑦大野政治編「地蔵堂通夜物語」尚書房 昭53年。

⑧「伝説と奇談」第一集関東(一)東京篇 日本文化出版社 昭34年。その中の「四谷怪談」。

⑨飯塚友一郎「歌川伎細見」第一書房 大正15年。第五回。参照。

⑩高崎正秀「源氏物語論」(高崎正秀著作集)第六巻 桜楓社 昭46年。

⑪「鶴屋南北怪談狂言集」東京春陽堂 昭3年。

⑫柳田国男「妖怪談義」修道社 昭31年。

⑬柳田国男「赤子家の話」(神を助けた話)実業之日本社 昭25年。

⑭高崎正秀「古典と民俗学」(尚書房 昭34年)。